

城内教育実習室

理学部 須原 正彦

およそ30名の学生達が20台の端末に群がって足の踏み場もない。8年前から理学部の学生に開講されている「電子計算機基礎論実習」の一コマである。城内のいくつかの学部・学科のカリキュラムの中の電子計算機を利用する授業科目の実習が、昨年秋に新装された城内分室に設置された情報処理教育実習用端末を使って、時間割を決めて行っている。キーボード上のアルファベットを探しながらたたくもの、マイコンなどで相当実力がついていと思しきものなどそれぞれのペースで与えられたテキストや課題を何とか熟している……いや悪戦苦闘していると言った方がよい。

かつてNEAC-2230が唸っていた場所にも時代の流れがみられ、TSS端末が並びU-1200のRJE端末と共に研究用に使用されている。今日ではコンピュータは特殊な人種が扱う代物から卒業し、誰でも手軽に用いる必需品になった感がある。我々の利用するコンピュータは、多岐にわたる学問を進める際の“情報処理”の補助的道具にとどまらず、compute (=together + to reckon) という言葉に抱含される奥深い新たな学問体系を築き上げる道具になりつつあり、城内分室もその末端(端末ではない!)を担っていくものと信ずる。

